

食糧需給の国際比較

中山誠記
唯是康彦

一、目的と方法

1 問題の所在

最近、わが国においても、世界全体においても、ある種の食糧危機が叫ばれている。わが国についていうなら、うち続く経済成長の結果、食糧需要は品目構成を変化させながら根強い上昇傾向を示しているが、これに反して、農業生産は労働力の流出を伴いながら、需要の変化に対応しなければならない関係上、再編成を完了しきっていないというわけにはいかない。こうした需給のアンバランスは価格に反映して、一方で米麦、畜産物の価格政策を余儀なくし、他方では生鮮食糧品の価格を上昇させる結果になっている。つまり、高価な食糧は需要超過、供給不足を

食糧需給の国際比較

- 一、目的と方法
- 1 問題の所在
- 2 推計方法
- 二、食糧生産の国際比較
- 1 食糧の土壌生産性

- 2 食糧の労働生産性
- 三、食糧消費の国際比較
- 1 食生活の近代化
- 2 価格表示の意味

物語っているわけである。ここで考えられることは、輸入によって国内需給を調整してはどうかということである。また、そのように輸入を積極的に考えなくても、現在でも既に小麦・大豆・砂糖・濃厚飼料などは大巾に輸入しているから、このままの状態で推移したとしても、これらの輸入は更に促進される可能性をもっている。したがって、わが国の食糧問題は、輸入に関してどのように考えようとも、われわれの目を世界の食糧問題へ向けさせる必然性を内包しているということができよう。

ところで、FAOの予測によると、世界(1)の人口は一九五八年を基準にして中位の成長率で一九七五年には約一・四倍、二〇〇〇年には二・二倍になるだろうと考えられている。ここで一人当りの食糧消費を考えると、澱粉質食糧は現在よりやや低い水準に維持されようが、豆類・野菜・果物・肉類・卵・牛乳・魚類・油脂類などは二〇〇〇年で二〇〇%ばかり増加しなくてはならないだろうといわれる。したがって、食糧消費全体は世界全体としては、一九七五年で一九七五〇九年平均の一・五倍、二〇〇〇年で二・七倍、特に、動物源食糧に対する需要は全食糧のそれを上廻ることになるだろう。しかるに、食糧生産の方はどうかというと、第二次世界大戦後の国際情勢の変化のために、生産増加は現在のままでは、とても増加する需要をまかないきれものではないらしく、小麦を除くほとんどすべての主要食糧は、供給不足に陥るだろうと考えられている。マルサス主義が衣がえして世界の食糧問題に再登場してくるゆえんもここにあるのである。と同時に、世界のこの傾向はわが国にとっても決して無視しえない重要な問題を投げかけてきている。いまや、食糧や農業だけが世界の相互連関から切り離されて、一国内で独自に考えられた時代は終ろうとしている。しかし、それは食糧や農業の各国の独自性を否定する方向ではなく、かえってそれを強化する方向で相互に連関することを要請しているかの感がある。(2)

以上の点を考慮するとき、われわれはわが国をふくめた世界全体の、食糧の生産から消費にいたる一貫したデータを作成する必要を痛感するのである。このようなデータがあれば、各国の食糧需給の独自性と連関性とは一望のうちに把握され、わが国および世界全体の食糧問題に新しい光明を与えてくれるものと期待される。以下では、そのようなデータの推計とその結果とを紹介する。この推計結果を利用した本格的な分析は、後日にゆずりたいと思う。

2 推 計 方 法

まず、以上の問題を考えると、推計されるべきデータは生産から消費へかけての整合性という点に特徴があるといわねばならない。数量データでこのような特徴を備えたものは、現在のところ、FAOで三カ年ごとに平均して発表している *Food Balancesheet* だけである。そこで、本推計は現在、一番新しいデータである一九六〇〜六二年版を採用することにした。ここでは日本を含めて六三カ国が報告されている。ただし、日本は別途にタイムシリーズで推計することにしたので、これからはずした。なお、食糧ばかりでなく、農業全般に関する考察も必要なので、たばこ・嗜好飲料・せんいなども、FAOの *Production Yearbook* から採用した。

さて、右の数量データをもとにして、食糧の生産から消費にいたる一貫した総合的なデータを推計するわけであるが、その場合、まず第一になさねばならぬ作業は個別品目の仕訳である。個別品目は数量データでは英語・フランス語・スペイン語で表現されているから、これを譚訳するという仕事も決して容易なことではないが、いまそのことを別としても、個別品目の仕訳には二つの段階を必要とする。第一段階は数種類の食糧を一つの個別品目名の

もとにくくる作業である。同じ種類の食糧ではあっても、国の違いや僅かの差から別の名称をもっている場合がある。また、国によって、数種ないし数十種の食糧を一括して、合計値だけしか発表していない場合もある。したがって、このような場合、世界全体について統一があり、比較可能なデータを作ろうとすると、数個の類似した食糧を一つの品目名のもとに一括する必要がある。更に、ある食糧についてはある国にのみ特有で、世界全体としては稀少なものもあり、それを一つの品目として取り扱うのがわずらわしいので、これらの稀少な食糧だけを一括して「その他」という名を与えた場合もある。あるいは、数量データにおいて最初から細い内訳なしに、中分類の名称で数量が与えられている食糧もある。以上の諸点を考慮すると、個別品目とはいっても、そのなかに幾つかの内訳をもったものにならざるをえない。したがって、与えられたデータから適当に個別品目を定め、その品目ごとに数量データの各項目を仕訳するという仕事が第一になされねばならない。

仕訳の第二段階は、以上のようにして仕訳された個別品目を更に中分類の項目に仕訳し、最後に、それら中分類の項目を合計して、食糧全体の総計を算出することである。中分類項目はFAOの数量データでも既になされていて、ここでもそれに従うことにした。つまり、穀類・いも類・砂糖・豆類・野菜・果物・肉類・卵・牛乳・(畜産物計)・油脂類・(食用農産物計)・魚類である。これらを合計して食糧総計とする。更に、生産では食用農産物計にたばこ・嗜好飲料・せんいという非食用農産物を加えて、農業生産総計を計算している。

ところで、種類の違った個別品目の数量を単純に合計することは許されない。栄養素(熱量・蛋白質・脂肪)のどれかへ換算してから集計することも考えられるが、これは非食用農産物には適当でないし、また食糧としてみても、後述するように、栄養素が必ずしも完全な単位であるとはいえない。ここでは価額による集計を採用することにし

た。そのためには、個別品目ごとに単価が必要である。ここではアメリカ合衆国の単価を採用している。アメリカ合衆国の単価を他の国の食糧に適用することがどんな意味をもつかは大いに議論のあるところである。世界中のすべての国がもしもアメリカ合衆国と同じ価格体系をもっていたとしたならば、という仮定法のもとでこの場合のすべての数値は理解されることになる。これは一見、奇異な感じはするが、国際比較という点では意味がないわけではない。むしろ、自国の価格体系で自国の食糧を評価したものを相互に比較することの方が、意味は不鮮明である。アメリカ合衆国の価格で世界中の食糧を評価することは、固定価格による数量指数を作成するのと同じことであるから、議論の余地はあるにしろ、指数論の立場から一応、許容される処置である。⁽³⁾

アメリカ合衆国の価格としては、原則として農場価格を採用してある。加工品とかその他やむをえないものに限って、卸売価格をもって農場価格の代用とした。生産のみならず、在庫変動・輸出入・中間生産物・消費のすべてについて、同一の価格が適用されている。これらの単位当り価格は、第1表に総括しておいた。この表は個別品目としてどのようなものをあげたかもついでに示していることになる。前述のように、この各個別品目には内訳があるわけだが、複雑になるので、省略した。各個別品目中、「その他」の単価はその内容をなしていると思われる品目の単価を平均しているか、その内容の分らない場合は、それが属している中分類の個別品目のすべて、ないし主要なものの単価を平均しているか、いずれかである。

なお、個別品目についてはいま一つ注意しておくことがある。それはものによって各項目のすべてを包括的な単一品目へ換算しているということである。この典型的な例は牛乳（山羊乳も含む）である。乳製品はすべて生乳へ換算され、生乳という単一項目へ合算され、それに生乳の単価が掛けられている。この場合の換算は次のようにして

第1表 農産物単価一覧表 (1960年アメリカ価格)

(単位: ドル/トン)

食糧需給の国際比較

小麦	70.45	冷野	33.00
麦	59.30	凍	118.45
麦	39.33	缶	886.62
麦	42.00	詰	885.28
麦	63.82	野	836.71
麦	119.24	菜	750.00
麦	58.07	菜	388.22
麦	97.43	肉	529.00
麦	58.09	肉	95.40
麦	40.67	肉	185.55
麦	34.00	肉	155.03
麦	38.70	肉	246.27
麦	9.40	肉	279.33
麦	15.67	乳	327.31
麦	127.33	油	242.86
麦	138.40	油	536.26
麦	30.26	油	164.44
麦	318.33	油	251.66
麦	102.00	油	249.08
麦	1,614.99	油	251.66
麦	495.59	油	280.15
麦	153.00	油	236.38
麦	91.00	油	236.38
麦	123.00	油	100.00
麦	122.00	油	64.00
麦	70.00	油	80.00
麦	105.95	油	81.28
麦	218.21	油	185.00
麦	177.49	油	113.00
麦	130.51	油	104.00
麦	188.65	油	60.00
麦	116.65	油	120.00
麦	113.44	油	60.00
麦	71.56	油	60.00
麦	122.07	油	100.00
麦	120.72	油	271.11
麦	228.73	油	1,204.77
麦	186.97	油	688.24
麦	62.22	油	502.80
麦	124.60	油	1,185.93
麦	82.67	油	1.60
麦	104.44	油	618.00
麦	82.89	油	211.00
麦	167.00	油	303.00
麦	195.56	油	229.00
麦	128.44	油	246.00
麦	45.00	油	599.00
麦	146.67	油	1,857.00
麦	71.11	油	131.80
麦	253.33	油	

行なわれた。すなわち、飲用乳と乳製品との熱量は分っているから、この比率を媒介として乳製品をすべて生乳へ換算したのである。ただし脱脂乳はバターと二重計算になるので除外した。また、バターはマーガリンからは区別されて仕訳されている。いま一つ大がかりな換算を行なうべきものに魚類がある。しかし、これについては情報が不十分なので、やはり熱量比率を利用しながら、かなり大雑把な計算を行なった。つまり、冷凍・缶詰類はすべて生鮮魚類の七〇%、乾燥・塩漬はすべて生鮮魚類の四〇%と仮定し、これらをこの比率で割って、生鮮魚類へ換算して、それに単価を掛けて求めたのである。

最後に、FAOの *Food Balancesheet* は生産と消費との間に次のような定義式を与えている。

生産 - 輸出 + 在庫増加 - 輸入 = 消費

消費 = 輸出 + 在庫減少 + 輸入 - 生産

ここで、加工用原料とはその加工品が食用であろうと、なかろうと、一旦、加工へ廻るものである。もし加工食品なら、それは再び同じデータの中に出現してくるから、ここで除いておかないと、二重計算に陥る可能性があるわけである。飼料と種子とは中間生産物と考えられている。しかし、厳密にはその中に輸入したものが入ってくるから、そういういい方は正しくない。けれども、種子で輸入するものは微量だし、飼料もここに記載されているのは加工したものではないから、大部分は国内生産に由来しているものと考えられ、一応、中間生産物と呼ぶことは許されよう。そうすると、ここで述べられている生産額は農林省という粗生産額のことであり、これから上述の中間生産物を控除すると、それが農林省という純生産額ということになるであろう。このようにして計算されたもののうち、農業生産額および食糧消費額の各中分類項目の全体に占める構成比とそれらのアメリカ合衆国の値を一〇

○とした指数とを末尾に掲載しておいた(附表1、4)。また、日本の場合については、昭和九〜一三年平均、昭和二六、三〇、三五、四〇年の各値について同様の計算を行なったものをあげておいた(附表5、6)。

既述のように、このようにして推計したデータの本格的な分析は今回は行なわないが、データの性格を知る上で、以下にこの推計結果の簡単な考察を試みることにする。その場合、その考察の基本的な立場を明らかにしておく必要がある。データをアメリカ合衆国の単価という共通の尺度で計測したから、一応、国同志の比較は可能にはなったが、その比較から何か共通のものがひき出せるということは少しも保証されていない。単位を共通にするということと、共通の傾向が存在しているということは別なことだからである。しかし、比較というものは元來、共通点と差異点の両方の発見を期待して、なされるものである。更にもう一步つっ込んでいえば、差異の発見は予め共通性を期待するところから生まれてくるということが出来る。すなわち、比較という認識作用は共通性の前提のもとに実現するものである。

われわれはある共通の指標を念頭において所与のデータをみる。すると、そこに二種類の差異が発生してくるはずである。一つはその共通指標を示してはいるが、国によってその共通指標の水準を異にしている場合で、これを量的差異と呼ぶことにしよう。いま一つの差異はその共通指標では示しえない差異である。これを質的差異と呼ぶことにしよう。ところで、この質的差異は別の種類の共通指標を採用すると、その量的差異へ還元されてしまうことがあるだろう。したがって、われわれは現実のデータの比較に当っては、幾種類かの共通指標を準備する必要がある。これらの共通指標のどれによっても説明し尽されない質的差異が残るとすれば、それこそ、その国の独自性ということになるだろう。しかし、このような独自性とは別に、幾つかの国に共通の独自性というものを考えるこ

とができる。つまり、データは幾種類かの共通指標の組合せによってかなりよく説明されるが、その組合せのウェイトが国によって違っている場合がある。このウェイトは一國に唯一つというのではなく、幾つかの國に共通な場合が多い。したがって、世界の諸國を共通指標の組合せによって分類することができるはずである。この分類をパターンと呼ぶことにすると、世界の國々を食糧消費や農業生産について、以上のような処理によって、幾つかのパターンに分けることができるだろう。

われわれがここで共通指標といっているものの内容がいかなるものであるかは、むしろ分析をとおして明らかにすべきもので、こうした処理には主成分分析が適当かと思われる。もし共通指標が明らかになるとすれば、その指標は人間の操作によって動かさうるものと、そうでないもの、あるいは人間の操作の容易なものと困難なものに分けられるはずである。もしこれが分れば、これはわが国の食糧問題のみならず、世界の食糧問題に、更には後進國開發問題に光明を与えずにはおかないはずである。しかし、今回はそこまで分析を進めることができなかった。以上の構想のもとに、ここでは唯一つの共通指標を想定し、その観点からデータをグラフで分析することにした。そうすることによって、将来の本格的分析の足がかりを与えようとしたのである。

なお、ここでとりあげた共通指標とは以下の考察によって明らかにするが、予め結論を与えると、一口にいつて「社会の近代化」ということである。この言葉の意味するところは複雑でかつあいまいであるが、ここでは一応、「社会の合理化」と同義に解しておく。したがって、省力技術の採用による生産の合理化、一人当り國民所得の増加による生活水準の向上、これらを可能ならしめる社会制度の整備などの各局面を相互連関的に包括しているものとする。⁽⁴⁾この共通指標を念頭において、ここで推計されたデータを考察することにした。

注(1) FAO, *Agricultural Commodities Projection for 1975 and 1985*. FAO『第3回食糧概観』

(2) これは国際分業を意味するばかりでなく、それはそれとして、別途に各国の自給率をできるだけ高い水準に維持することを含んでいる。

(3) 評価単位をアメリカ合衆国の価格にしなければならない理由は何もない。日本の価格を採用してもよいわけである。ただ、農産物価格は国によって偏った値をもつ場合もあるし、また世界の農産物の品目をできるだけ汎山消費している国もそう多くあるわけではない。第一、価格データを完全に備えている国も少ない。それらの点やら、農業の先進性やらを考慮するとき、アメリカ合衆国は比較的よい基準を与えるものと思われる。もちろん、他の国の価格による評価データを作り、相互に比較してみることは重要なことで、今後の課題にしたい。

(4) 「社会の近代化」を「社会の合理化」と同義に解したが、ここでのいう合理性とは必ずしも科学万能主義をいつているのではない。ある条件のもとである目的を遂行するために最適の方法を見出し、これに従って行動するとき、その行動は合理的であるといわれる。そういう意味の合理性である。なお、「社会の近代化」ないし「社会の合理化」は歴史的には資本主義や社会主義という体制と無関係ではないだろう。しかし、現在のところは、そうした哲学的背景への議論には立入らないことにする。また、「社会の近代化」のほかにアジア、アフリカ、ヨーロッパなどの地域差によるパターンを導入する考え方もあるが、この地域パターンの概念自体も分析以前には必ずしも明瞭ではないので、今回は考慮の外におくことにした。

二、食糧生産の国際比較⁽¹⁾

1 食糧の土地生産性

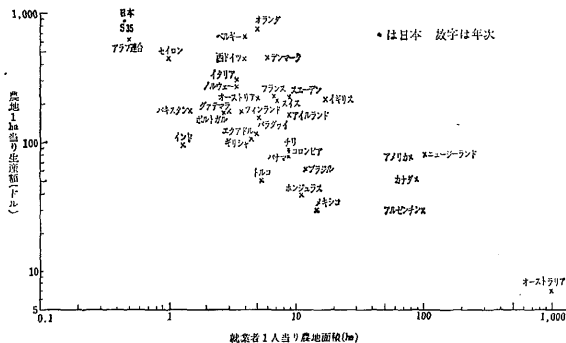
経済学において生産の分析をする場合、通常、生産関数を前提し、それを中心に論議が展開される。土地を A 、労働を L 、資本を K とし、これら三種の生産要素が生産 P を決定すると仮定する。また技術進歩 T は中立的で生産関数 f のシフターであると考ええると、生産関数は形式的には $P = T \cdot f(A, L, K)$ と書くことができる。ところで、

現在推計したデータにこのような関数が適當であるかどうかは、大いに問題がある。ここにあげた生産の三要素は名称こそ同じであっても、世界という次元で考えるなら、国相互間の異質性は余りにも大きすぎる。また、技術の内容にしても国によって大きな差異があり、一様でないばかりでなく、これが生産要素の性格にも影響を与えている。いわんや、技術の中立性に関する仮定は極めて現実性がない。そればかりでない。現実の生産関係を規定しているものは、以上のほかに、気候・地体・社会制度などがあり、これによって違っていることはいうまでもない。こう考えてくると、いま推計されたデータに生産関数を適用することの無謀なことは極めて明瞭である。しかし、そのようなことは当然、想定した上で、それでもなおかつ、何かそこに法則性が支配していないだろうかということを考えてみることは自由であらう。

現在は精密な計算を行なってみる段階ではないので、生産の規定要因をできるだけとり扱いのいいようにしておくのが得策である。そこで、先の生産関数に一次同次の仮定を導入して、 $(P/A) = T \cdot f(L/A, K/A)$ とする。農用地単位面積当り生産は、技術一定のもとでは、同じく単位面積当り労働と単位面積当り資本とによって規定される。この関係を推計したデータに適用するのが、当面の課題である。しかし、ここでデータ上の制限にぶつかる。農用地についてはかなりの国についてのデータが F A O の *Production Yearbook* からえられるが、資本についてはそういうわけにはいかない。資本の内容は多様であって、そのデータは肥料を除いて極めて制限されているが、仮りにデータ上の制限がなかったとしても、これらの多様な項目を価格ウェイトで集計しなくてはならない。しかし、いまのところ、そのような作業は完成していないので、資本のデータは結局、使用できないわけである。

そうすると、現在、考察できることは農用地単位面積当り生産額（土地生産性）と同じく単位面積当り農業就業

第1図 農業就業者1人当り農用地面積と土地生産性

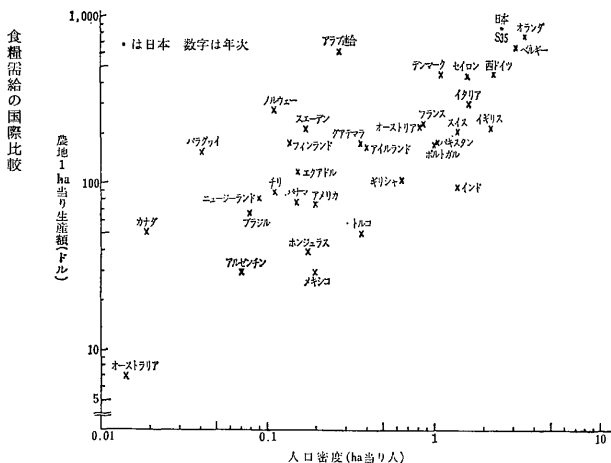


食糧供給の国際比較

者数との関係である。これを主な国について両対数目盛で図示したのが第1図である。単位面積当り農業就業者数の代わりに、その逆数である農業就業者当り農用地面積が使用されている。データの分散が極めて大きいので、図示は不完全であり、この図から余りはつきりした傾向は掴めない。アメリカ合衆国を始めとする旧植民地国は右下に、日本やアジア諸国は左上に位置しているが、その他の国はすべて中央にちらばっているようである。多少、右下りの傾向はみられなくもないが、余り明瞭ではない。ただ一ついえることは、この中央部の分散については、先進国の土地生産性の方が比較的高いようであるということである。

旧植民地国の農業生産は西欧諸国のその延長上に考えられるから、これらを一括して、第1図に右下りの傾向を読むことはできるが、農業就業者一人当り農用地面積の両者の開きは現在のところ余りにも大きいようである。しかし、旧植民地国の土地生産性を上げる可能性はこれからみてないことはないわけである。他方、農業就業者当り面積に余り大きな差異がない国

第2図 人口密度と土地生産性



にあつては、土地生産性の違いは作物構成の違いにもよるだろうが、多くは投下資本量と技術水準の差であるということができよう。ヨーロッパ系の農業生産においてはオランダ、ベルギーがその典型となり、アジア系の農業生産では日本がその模範となるだろう。わが国の数字は一九六〇年の値である。いずれにしろ、同一規模での土地生産性の国ごとの分散はかなり大きなものがあり、したがって、資本投下および技術進歩による改善の余地は世界的にみてまだかなり残っているということがいえないだろうか。もちろん、既に述べたように、農業生産を規定する要因は雑多であるから、余りにも単純に割り切った考察は誤りに導くだろうが、以上の点が全く成立しないということもないはずである。

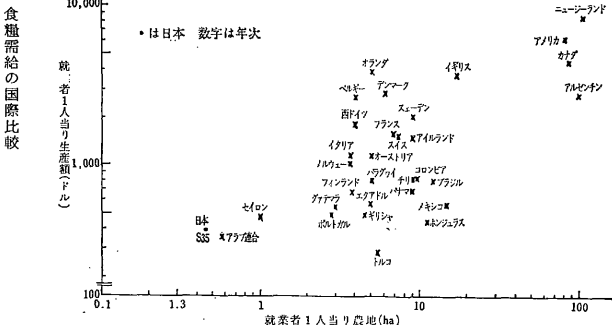
第2図は土地生産性を人口密度と関係させてみたものである。両対数目盛によっているが、これ

また分散が極めて大きい。国によっては著しく偏奇しているようであるが、概して、人口密度の高い国は土地生産性も高いという傾向がこれからみてとれる。土地生産性は確かに技術進歩や資本投下だけによって決定されるものではなく、気候とか地体とかの影響も無視することはできない。そうして、これら自然的条件の影響はそれを取り除くのに大変な努力を要求するだろう。しかし、第2図でみると、人口密度の高い国はおそらく、土地の相対的狭小性の故に、土地利用に関する努力を歴史的な時間とともに集積してきたと考えられる。これらからみても、土地生産性の向上には人間の努力によって可能となる分野が相当に残っているのではないかと想像される。将来、宇宙空間が広範囲に利用されない限り、また、無機物から食糧が生産されない限り、食糧生産は地球上の一定の土地で行なわれることになるが、人口が急速に増加するなら、当然、食糧不足が予想されることになる。しかし、土地生産性の向上にまだ余地があるとすれば、これは食糧危機に対する一つの解答になりはしないだろうか。

2 食糧の労働生産性

土地生産性を向上させる経済的な要因としては、技術進歩と資本投下ほかに、労働投下が考えられる。「社会の近代化」の特徴の一つに省力的技術を採用することによって生産を合理化するということが考えられる。これは一人当り国民所得の増加とも関連しているし、また、産業構造の改造とも関係している。とくに後進国の開発にとっては生活水準とも絡む問題である。とすれば、技術進歩および資本投下による土地生産性の向上は「社会の近代化」の線に沿った方策であるが、労働多投による土地生産性の向上は必ずしも歓迎すべき方法ではないようである。むしろ、土地生産性の向上に関する見通しがいたら、次には労働生産性をいかにして向上させるべきかという問

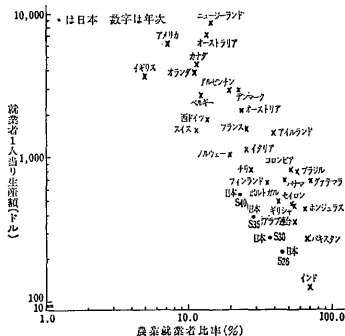
第3図 農業就業者1人当り農用地面積と労働生産性



題を考えなくてはなるまい。これはわが国の農業においても極めて重要な問題である。

そこで、再び先の生産関数に戻って、もう一度、一次同次の仮定を導入することによって、次のような生産関数を誘導してみよう。すなわち、 $(P/L) = T \cdot f(A/L, K/L)$ ここで資本データーの欠如から、資本装備率の労働生産性への効果を、直接考察することはできない。それに反して、農業就業者一人当り農用地面積はデータとしてえられるから、それと労働生産性との関係をみることはできる。第3図がそれである。ここでも非常に大雑把に観察すれば、アメリカ合衆国などの旧植民地国が右上にあり、インドなどの後進国は左下にあるから、労働単位当り土地面積と労働生産性との間には正の相関が認められるということができよう。しかし、グラフの中央上部に西欧諸国が集まっていることによって、この正の相関をやや乱しているようである。つまり、グラフの中央は労働単位当り面積が余り違わない国がほぼ縦に配列されているということが出来る。こうした違いはどこから生まれてきたかという点、ここでも技術水準お

第4図 農業就業者比率と労働生産性



よび資本の投下水準の差があげられるだろう。もちろん、これを裏付けるだけのデータは、現在欠如しているが、西欧諸国が上位にあるということから、以上の推定はほぼ間違いないものと思われる。

「社会の近代化」に伴って、農業労働は農外部門に流出し、それが労働単位当り農用地面積を増加させ、労働生産性を向上させることになるが、食糧生産の著しい減少を伴わずにこれを可能ならしめるものは技術進歩と資本投下とであろう。

第3図でみたように、西欧諸国が労働単位当り農用地面積の割には高い労働生産を示しているのは、そのような関係を背景にもっているはずである。そこで、技術進歩や資本投下の

データを欠いているから、全就業者中に占める農業就業者の比率をその代用に使ってみた。つまり、この比率が減少している国は、輸入を前提しない限り、少ない農業労働力で今までと同じか、またはそれ以上の食糧生産を行なわねばならないから、当然、技術を向上させ、資本を多投し、労働生産性を向上させているはずである。したがって、農業就業者比率と労働生産性とは負の相関をもっているということになろう。事実、第4図はそれを示しているように思われる。

ここでわが国の昭和二六、三〇、三五、四〇年の各年の値を示してみた。わが国においても、農業就業者比率と

労働生産性とは逆の相関をもって推移しているようである。その限りにおいては、わが国においても、以上の想定は正しい、世界の全般的傾向からわが国が逸脱しているものでもない。しかし、一つ注意すべきことは、わが国の労働生産性が世界の全般的水準にくらべてかなり低く、世界の水準の下限を形成しているということである。この理由としては何よりも労働単位当り農用地面積の狭小性があげられよう。しかし、ひるがえって考えてみると、わが国は既に後進国よりかなり低い農業就業者比率をもっているであつて、それにもかかわらず、後進国と大差のない、あるいはほんの僅かしか上廻っていない労働生産性をみせているということは、非常に奇妙な現象であるといわねばならない。なぜなら、この低い労働生産性で農業者とその家族のみならず、かなりの数の非農業者とその家族をも養っていることになるからである。これは当然のことながら、わが国の国民一人当り食糧消費の低水準に關係している。そうすると、日本人は何故、低い食糧消費水準で満足しているのかという次の問題が発生してくる。これは次節で考えることにしよう。

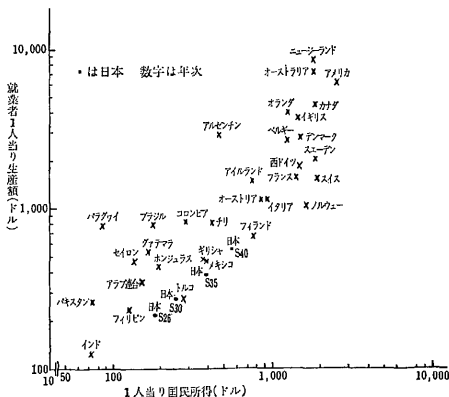
ところで、「社会の近代化」は一人当り国民所得の増加と密接に關係しているが、一人当り国民所得が高いといふことは、その国の技術や資本の水準も高く、産業構造も農業偏重を脱しているに違ひないと思われる。そうすると、農業における労働生産性は、一人当り国民所得と正の相関をもつに違ひないと考えられる。つまり、農業部門での技術や資本のデータがえられないから、それらの効果を間接的に把握するもう一つの方法として、一人当り国民所得を利用してみたのである。第5図がそれである。これによると、かなりの分散はあるにしても、以上のことはほぼ成立すると考えられる。また、この傾向はわが国についてもあてはまるが、もちろん、労働生産性の水準そのものは他の数国とともに世界の水準の下限を形成していることは第4図の場合と変らない。したがって、わが国

一八

注(一) この分野での分析は極めて少なく、おそらく次の論文をあげるにとどまるであろう。大川一司「農業労働生産力の国際的比較」(『農業総合研究』第二巻第三号)。

食生活の近代化

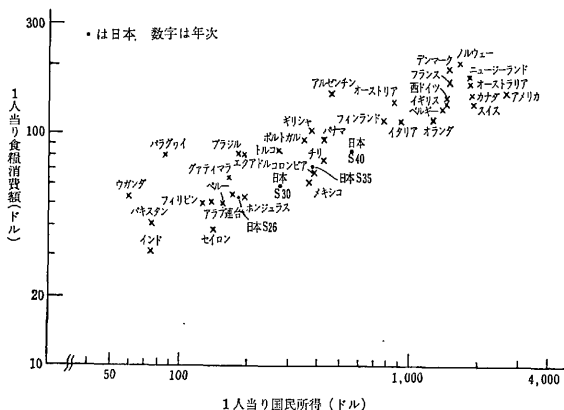
第5図 1人当り国民所得と労働生産性



澱粉質食糧の比率は低下する傾向にあるということである。このような従来の考察には食糧を栄養素、特に熱量に換算した値が利用されてきた。しかし、食糧のデータを本推計のように価値額で計算したとしても、以上の結論は大体あてはまるようである。付表3にはアメリカ合衆国の一人当り食糧消費額を一〇〇とした場合の、世界各国の一人当り食糧消費指数が示されているが、それをみても、各国の一人当り国民所得の水準と対応関係が認められるし、付表4の食糧消費額の構成比をみても、穀類やいも類の比率は一人当り国民所得の高い国ほど低下している傾向にある。したがって、本推計において、従来のそうした認識を根本的に改めるような事実は存在しない。ここでは第一の傾向、すなわち、一人当り国民所得と一人当り食糧消費額との関係だけを図示しておく。第6図がそれである。また、この図にはわが国の年次別の消費額も描かれている。両対数目盛であることはこれまでの図と同じである。

それでは、なぜ以上に述べたような関係が世界的にも、日本の年次別趨勢にも認められるのかというと、これには必ずしも明瞭な答えはえられない。一応「社会の近代化」という生産のところでも述べたと同じ共通指標をここでもあげておこう。⁽²⁾省力的技術による労働生産性の向上は、人間を肉体労働から解放して、それだけに澱粉質食糧を必要としなくさせ、この比率を低下させると考えられる。また、一人当り国民所得が上があれば購買能力は増加するのだから、食糧消費そのものが増加することもまた当然であろう。しかも、その増加が主食から副食への推移を伴うことも必然的で、この傾向は生活の合理化による栄養知識の普及からも促進されることであろう。更に、近代化した社会は技術水準も高く、食糧の増産も、特に穀類以外のものの増産も可能にするので、食糧消費のこの傾向は供給の側からも保証されることになる。以上が「社会の近代化」という観点からする食糧消費の極めて大まかな

第6図 1人当り国民所得と1人当り食糧消費額



食糧需給の国際比較

二〇

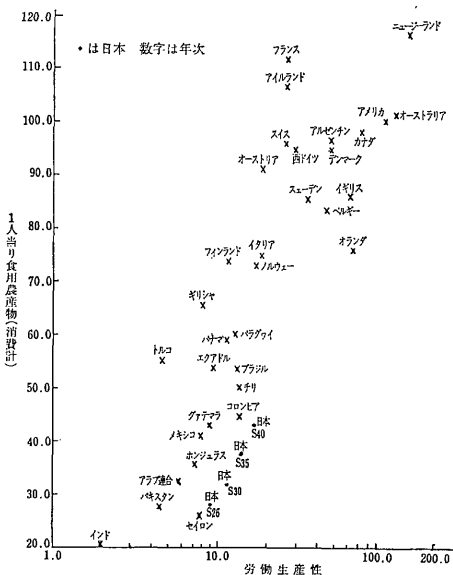
説明である。もちろん、食糧消費はこのほかに、気候・地体・民族の体質・宗教・文化などからも影響を受けるから、以上の説明は完全なものではない。しかし、「社会の近代化」は自然条件や人文条件を变革することに密接に絡んでいるから、それらをふまえて、食糧消費における一つの共通指標としての資格はもつものと思われる。このような「社会の近代化」は一人当り国民所得の水準に典型的にあらわれているので、一人当り国民所得と食糧消費の以上の関係が認められたものと考えられる。

ところで、第6図に戻ってみると、前節で予想された通り、わが国の食糧消費は世界の水準からすれば、正にその下限をつたって進んでいるような感じがする。労働生産性の場合より幾分、高目にみえるのは、一人当り食糧消費額には魚類の消費が含まれており、この消費は日本がかなり高いのに、農業の労働生産性には魚類は含められず、農産物に限定したためと思われる。とにかく、第6図によると、日本と同水準の一人当り所得をもった他の国はほとん

どが、日本より高い一人当り食糧消費水準を示している。ここで、当然、なぜこのような低水準が発生したのだろうかということが問題になってくる。もう一步つっ込んでいえば、日本人はなぜこのような食糧消費の低水準に満足しているのかという疑問が生まれてくる。この満足は労働生産性の低水準から余儀なくされたともいえるが、逆にこの満足があったからこそ、農業の労働生産性が低い水準のまま、農業就業者比率が低下してきたのであるともいえる。これは延いては産業全体の低賃金や貯蓄率の高水準とも関連して、日本経済の成長率と関係する極めて重要な問題へ発展するだろう。⁽³⁾したがって、上述の疑問は是非、考えてみなくてはなるまい。

一人当りの国民所得は第5図では労働生産性と正の相関を示し、第6図では一人当り食糧消費額と正の相関を示している。とすると、労働生産性と一人当り食糧消費額も正の相関を示すはずである。これを半対数目盛で示したのが第7図である。この場合、両者はアメリカを一〇〇とした指数である。なお、両者の対応関係を明瞭にするために、労働生産性の分子には食用農産物の生産額がとられ、一人当り食糧消費額も魚類を除いて、食用農産物の消費額とした。第7図をみると、右上りの形にはなっているが、インドから西独ぐらいまでにかけては勾配が急でそれから右、西欧諸国や旧植民地国は緩やかな上昇傾向を示している。もちろん、生産と消費の間には輸出入やその他の要因が作用しているから、当然、厳密な対応関係はないわけであるが、それにしても、第7図に示されたキックはなかなか興味のある事実を示している。つまり、西欧水準までは、食用農産物の労働生産性は、明らかに一人当り食糧消費水準を上げることに貢献しているが、その点を通過すると、労働生産性の上昇はほとんど一人当り食糧消費水準を上げることに役立っていない。それではこの労働生産性は何に貢献しているかというところ、それは食糧不足の国々への輸出に役立っていることもさることながら、一番大きな役割は農業就業者比率の低下ということである。

第7図 労働生産性と1人当り食糧消費額
(アメリカ基準にした指数)



あるうと思われる。極度に少ない労働力でその国の全人口をできるだけ多く養うということが、西欧諸国の農業の課題となっているのである。この場合もある水準までくると、土地が制約条件となってくる。旧植民地国のように広大な土地がある場合は、極めて大きな労働生産性を示しているが、たとえば、イギリスの場合は、農業就業者当り農業用地面積は労働の減少によって増大し、その結果、高い労働生産性に達しているが、自給率は極度に低くなってしまっ

ている。いま一つの例は、デンマークやオランダで、ここでは土地の制約を畜産によってある程度、克服しようとしている。家畜は土地の延長とみることができるからである。

さて、わが国であるが、ここでは昭和二六、三〇、三五、四〇年の五個の数値を示しておいた。わが国の歩みは

世界全体の傾向から逸脱することはないが、かなり低目の地点を世界の傾向に沿って進んでいるということができよう。これは魚介類消費を落としていたためと思われる。その点を考慮すれば、わが国の一人当り食糧消費と労働生産性と共に低水準にあるということは、両者が独立にそのようになっていくということではなく、密接に関係しているためと考えられる。世界全体の傾向に照らしてそれは明らかなのである。

そこで、わが国の特殊性を考える段階になったのであるが、このためには世界の生産物成長を示した付表2とわが国のそれを示した付表5とを、また世界の消費構成を示した付表4とわが国のそれを示した付表6とを、それぞれ比較してみよう。そうすると、まず気付く点は野菜と魚類との比率が相対的に高く、畜産物の比率が一人当り所得水準の割には低い点である。このような食糧消費構成が成立する前提条件は、われわれ日本人には直感的に米中心の食形態を連想させる。つまり、米を中心に伝統的に作り上げられた和食がアメリカ合衆国価格で評価するとき、極めて低価額のものとなるのであろうと推定される。昔から、米は副食なしに米だけ食べても十分うまいということがいわれてきたが、このような性格は「社会の近代化」が進んだ今日でも、基本的には失われておらず、これが一人当り消費額の低水準をもたらし、それが農業労働の生産性を低水準に維持し、しかも、農業就業者比率を下げ、日本の近代化を遂行してきたのであるということができよう。⁽⁴⁾

2 価額表示の意味

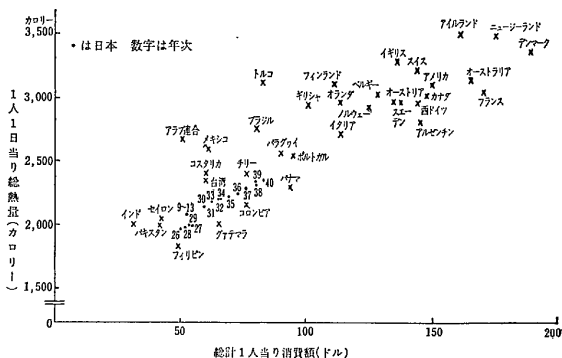
食糧の生産から消費にいたる一貫したデータを推計する関係上、食糧消費も価額で推計した。しかし、食糧消費については、従来、栄養素による計算が行なわれてきているので、栄養素表示の消費と価額表示の消費との関係が

明らかにされねばならない。理論的には次のように考えられる。すなわち、栄養素による表現は、熱量と蛋白質と脂肪とを単一の數量に還元することはできない。しかるに、価額表示では、植物源食糧より動物源食糧を高く格付けるから、いつてみれば、価額は三栄養素による三種類の消費表示にウエイトをつけて合計し、一本化したような作用をもつものと考えられる。とすれば、消費額と消費熱量とを關係づけると、その高水準は伸びず、消費額と蛋白質とを關係づけると、熱量よりは対応關係が直線的になるだろうと予想される。これを實際に図示してみたのが第8圖と第9圖である。これらは普通目盛で、分散が大きいから、上述の關係は余りはつきりしない。しかし、その傾向は存在しているような気がする。

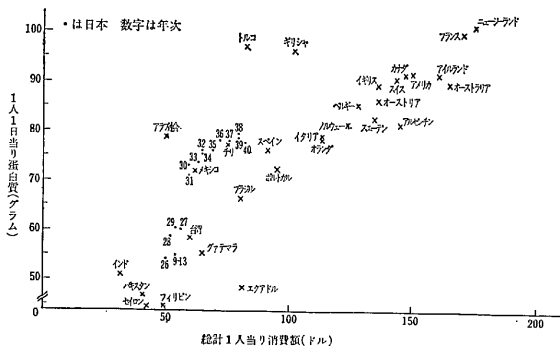
ところで、日本については年次別に示されているが、ここに極めて興味ある關係にぶつかる。まず、第8圖をみると、日本は世界全体の平均ないしそれよりやや低目のところを上昇している。労働生産性や一人当り消費額を一人当り國民所得と關係づけたときには、日本は世界全体の下限を形成していたが、第8圖はそれよりは幾分ましな感じがする。つまり、日本人は価額單位当りには國際的にみて平均水準よりやや低目ではあるが、決して著しく低くはない熱量となっていることになるのである。あるいは、日本人の摂取している熱量の単価は國際的にみて決して高いことはないという結論に達する。日本人の体格を考えると、価額と熱量との關係は世界水準に照らして、それ程不満足なものではなかったということになろう。

・ 価額と蛋白質との關係は更に面白い結論に導く。第9圖がそれであるが、日本の地位は國際的にみて、むしろ高いところにある。元來、日本は所得に比して蛋白質摂取量は高いのであるが、価額との關係においても、アラブ連合やトルコ、ギリシャを例外とすれば、日本は世界の全般的傾向の上限を形成しているのである。ここで二九年か

第8図 1人当り食糧消費の価額と熱量



第9図 1人当り食糧消費の価額と蛋白質



ら三〇年にかけて飛躍があるのは、昭和三〇年から米の生産が飛躍的に増大したと関係もしているが、データ作成上の断層による部分もあるので、その点を注意してみる必要がある。しかし、それを考慮してみても、日本の水準が高いという事実は変らないのであって、このことは従来、指摘されなかった点である。日本人の蛋白質摂取量は国際的にみると、価額に比して著しく高い水準にある。あるいは、日本人が摂取している蛋白質の単価は国際的にみて著しく安いのである。蛋白質に関する限りはイタリヤやオランダ水準に既に到達しており、しかも、それが安い価格で達成されているのである。このようなことがなぜ生ずるのであるうか、最大の原因は熱量の場合と同じく、米食に由来しているものと考えられる。わが国の蛋白質の最大の供給源は米であって、米は昭和九一三年平均で全蛋白質量の四五・九%を占めていたし、四〇年でも二八・六%で、そのウェイトはへったが、依然として第一位の地位を占めている。⁽³⁾ プロテン・スコアでみても、米は七二で、小麦粉の四七にくらべて、かなり上質の蛋白であるといわれる。⁽⁶⁾

以上のように、世界の食糧の生産と消費を「社会の近代化」という共通指標のもとに考察し、その中におけるわが国の特殊性を認め、それが米食に由来しているらしいという結論に達した。しかし、以上の議論はあくまでも、世界の食糧をアメリカ合衆国の価格体系によって評価したデータに基づいている。この価格体系が異なれば自ら達した結論に達するかもしれず、それらについては、本データの本格的分析と共に、後日の課題にしたいと考える次第である。

注(1) この点に関しては多くの論文で指摘されているが、ここでは中山誠記『食料の経済学』（昭和三九年）をあげておく。
(2) わが国についていうなら、この傾向は「食生活の洋風化」と呼ばれてきた。しかし、これはわが国の「社会の近代化」

の一環にみることが出来る。わが国は西欧文明を導入することによって「社会の近代化」を遂行してきたのであって、その限りでは「社会の近代化」と「社会の洋風化」とは同義になつてゐるのである。しかし、わが国が目ざしていることは「社会の近代化」であつて、「社会の洋風化」はその一つの方法であるから、両者が乖離する可能性も存在しているのである。「食生活の高度化」とか、「食生活の多様化」という方が食生活の本質に則した表現のように思う。

(3) もっとも、このデータはアメリカ合衆国の価格体系を適用しているから、日本の相対的に低い価値額が直ちに日本の低賃金や高い貯蓄率に連なつてゐるとはいえない。もし、農産物に関する自由貿易が行なわれ、そこで支配している価格体系がアメリカ合衆国のそれに等しいとすれば、以上のような議論は可能となるだろう。

(4) 以上の議論はあくまでもアメリカ合衆国価格によつてゐるから、最近のように国内米価が国際米価の二倍になつてゐる状態は極めて問題적이다である。

(5) 昭和三九、四〇年の値が三八年の値より低目なのは一人当り米消費量が低下し出したことによるものと思われる。

(6) 米国農務省編「食品のアミノ酸含量表」による。厳密にはこの値には問題があるが、大体の相対的關係を知るにはこれで十分と思われる。

〔後記〕 本稿は故中山誠記氏が生前行なつていて、病のため途中で挫折した作業を、氏の了承のもとに、共同研究者である唯是が引き継ぎ、とりまとめたものである。このために、論述のなかで指摘した問題点のいくつかには故人の意図されたこととは違ふ結果になつてしまつたものもあるが、その責任のすべては唯是にあることをご了解願いたい。

(研究員)

付表1 農業の国際的生産指数 (アメリカ=100)

穀類	芋類	砂糖	豆類	野菜	肉類	卵	牛乳	魚
2.6	0.0	0.4	2.7	3.2	1.0	0.3	2.2	—
9.0	17.1	18.2	3.7	7.2	15.8	3.8	7.9	16.9
6.6	4.4	37.9	1.2	4.7	10.1	3.8	11.7	13.5
1.3	26.2	6.1	0.8	3.2	2.6	1.8	5.3	1.1
1.1	15.8	9.9	2.7	5.6	3.6	4.3	7.3	11.9
0.3	5.6	1.8	3.7	1.1	0.4	0.1	0.2	0.2
14.4	149.7	89.7	136.9	4.7	12.4	7.2	9.2	65.7
13.6	15.2	21.7	2.4	9.2	8.3	7.7	14.6	78.9
1.0	2.3	0.1	54.2	2.8	0.1	0.3	0.2	14.6
1.1	5.6	1.4	5.7	4.4	1.2	0.5	1.4	82.5
2.0	21.1	19.0	17.1	5.1	1.2	1.0	0.0	52.5
1.5	18.6	51.0	13.5	1.4	3.2	1.2	3.3	10.9
5.1	34.4	12.7	77.9	30.1	3.1	1.2	4.9	147.5
2.6	4.8	1.0	34.4	2.4	1.7	1.9	4.8	2.5
0.1	0.2	1.7	2.6	0.2	0.2	0.3	0.2	0.9
2.5	12.5	5.8	3.0	2.3	6.3	3.2	9.5	179.8
0.4	4.9	3.9	11.3	1.5	0.5	0.3	0.6	9.1
0.3	0.1	1.4	3.0	0.2	0.2	0.4	0.4	2.8
0.9	9.7	1.3	0.4	0.4	0.9	1.2	6.4	10.4
13.7	106.6	2.1	21.6	50.9	20.5	13.7	43.2	150.7
8.0	179.8	40.2	0.9	15.0	17.9	12.3	4.6	61.6
1.6	3.5	0.7	10.7	8.4	0.9	1.6	2.0	21.6
0.4	0.3	21.8	2.8	1.5	0.3	0.2	0.2	0.3
0.2	0.4	0.6	2.5	0.1	0.1	0.2	0.2	0.5
1.0	17.5	10.0	6.0	9.3	3.3	2.7	3.5	2.8
3.1	0.7	4.3	11.1	1.2	3.3	1.1	3.2	6.1
1.1	0.1	0.0	2.1	2.8	1.8	0.2	0.9	1.8
72.5	39.5	239.8	1,264.5	9.0	2.6	2.8	37.0	174.6
0.7	15.3	3.3	0.4	17.0	3.0	1.2	4.9	6.3
0.0	0.9	0.8	0.8	1.8	0.4	1.8	0.6	2.8
9.3	28.4	23.8	270.4	57.3	7.6	10.3	18.0	54.6

ン	0.1	0.1	—	1.4	2.1	0.0	0.1	0.1	0.0
ン	0.1	0.3	—	0.7	1.5	0.0	0.1	0.1	0.4
ン	0.1	0.1	—	2.1	0.4	0.1	0.0	0.1	0.6
ン	1.5	6.9	4.0	5.4	1.1	0.6	0.4	0.1	7.6
ン	—	0.0	10.2	0.1	5.8	4.6	0.0	0.0	0.3
ン	5.3	4.6	38.7	60.1	10.3	4.4	5.0	7.9	37.9
ン	1.0	36.7	14.5	7.4	1.3	4.7	9.1	12.4	100.1
ン	0.2	1.7	3.3	0.8	0.9	4.4	1.1	0.9	4.0
ン	0.2	8.7	0.1	—	0.9	0.8	0.8	2.9	284.5
ン	19.1	3.5	36.8	81.3	11.3	1.8	1.0	20.1	55.8
ン	0.1	0.5	0.9	2.5	0.1	0.2	0.1	0.1	3.9
ン	0.1	7.6	1.3	1.7	0.2	0.4	0.0	0.2	0.2
ン	0.8	13.4	18.8	7.3	5.7	1.0	0.2	0.7	932.0
ン	4.7	9.9	9.3	31.0	5.7	2.5	2.9	0.0	90.1
ン	8.5	303.7	64.0	14.2	20.0	9.3	8.8	22.5	162.6
ン	1.1	7.5	4.0	9.4	6.7	0.9	0.8	0.8	73.4
ン	6.5	21.3	17.0	31.2	9.4	4.0	3.0	5.3	4.6
ン	3.5	2.6	23.1	15.7	2.4	4.3	1.7	4.7	66.2
ン	1.0	1.7	0.1	45.0	1.7	1.6	0.7	2.1	3.2
ン	0.4	9.2	0.8	0.4	0.0	1.7	0.0	1.7	0.4
ン	0.1	0.0	0.3	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7
ン	1.9	11.8	6.5	1.8	1.5	2.5	2.5	10.6	57.3
ン	0.7	0.2	0.5	10.2	1.2	0.4	0.2	0.6	—
ン	9.4	10.6	17.1	41.5	25.8	2.1	1.7	7.4	29.0
ン	0.5	34.0	2.4	23.0	1.0	0.6	0.1	0.4	10.7
ン	4.4	3.6	23.0	19.4	16.7	1.3	0.9	2.0	34.9
ン	5.5	54.6	31.6	10.2	18.1	12.3	20.9	5.8	779.4
ン	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
ン	0.4	1.0	0.9	3.5	0.7	2.2	0.5	1.3	1.4
ン	0.7	5.6	6.5	15.2	0.8	1.1	0.4	0.3	36.0
ン	6.5	21.6	6.1	17.2	7.6	3.8	1.9	4.2	6.7

	油	脂	果	物	非 食 糧		たばこ	食生産額	非生産額	粗生産額	純生産額	男 性 労働生産性
					せい	嗜好飲料						
アラビシタン	0.2	—	26.5	1.4	—	—	—	1.6	0.9	1.5	1.8	—
アラビシタン	7.3	—	11.1	10.4	—	—	4.9	11.8	8.4	11.5	12.8	47.5
オーストラリア	0.8	—	11.1	28.0	—	—	1.5	8.7	18.4	9.5	10.6	115.8
オーストラリア	0.5	—	7.5	0.0	—	—	0.1	3.1	0.1	2.9	2.7	18.8
ベネズエラ	2.0	—	2.0	0.4	—	—	0.2	3.7	0.3	3.5	3.4	44.1
ベネズエラ	0.1	—	0.1	—	—	—	0.1	0.5	0.0	0.4	0.5	2.7
ブラジル	7.2	—	50.9	22.5	—	—	18.0	20.8	20.9	20.8	23.5	12.9
カナダ	3.3	—	3.7	0.2	—	—	9.9	10.5	30.7	9.9	9.8	73.1
イロ	5.9	—	—	3.0	—	—	0.4	1.9	2.1	1.9	2.3	7.8
チリ	0.5	—	1.3	0.7	—	—	0.7	1.4	0.7	1.4	1.6	1.6
チリ	0.8	—	3.5	0.3	—	—	1.9	2.2	0.9	2.1	2.4	8.5
コロンビア	1.0	—	2.9	2.3	—	—	3.1	4.4	2.6	4.2	5.0	13.4
コロンビア	7.4	—	40.2	4.1	—	—	3.5	8.2	3.9	7.8	8.4	8.1
エチオピア	2.0	—	0.3	0.1	—	—	—	2.8	0.1	2.6	3.0	—
エチオピア	0.1	—	—	—	—	—	0.1	0.3	0.0	0.3	0.4	14.0
インドネシア	1.0	—	1.9	0.0	—	—	—	5.1	0.0	4.7	4.2	47.2
インドネシア	1.1	—	13.3	0.1	—	—	0.1	1.3	0.1	1.2	1.5	9.4
エルサルバドル	1.3	—	0.3	1.7	—	—	—	0.4	1.1	0.5	0.6	6.6
フランス	0.6	—	0.3	0.0	—	—	—	1.8	0.0	1.6	1.5	11.1
フランス	6.7	—	93.3	1.2	—	—	4.3	26.3	2.3	24.4	23.9	25.8
ドイツ	3.8	—	63.5	0.1	—	—	1.0	21.1	0.5	19.5	19.4	29.7
ドイツ	4.5	—	11.5	3.0	—	—	7.9	2.3	4.8	2.5	2.8	7.9
ギリシャ	0.1	—	0.9	1.0	—	—	0.2	0.9	0.7	0.9	1.1	8.9
ギリシャ	0.1	—	5.3	0.1	—	—	0.4	0.4	0.2	0.4	0.5	7.2
ハンガリー	2.6	—	8.5	0.6	—	—	1.9	3.5	1.1	3.3	3.7	10.8
インドネシア	1.6	—	0.5	4.1	—	—	1.2	2.3	0.8	2.4	2.6	4.2
インドネシア	0.3	—	—	0.7	—	—	1.0	0.8	0.8	0.8	0.9	—
イスラエル	37.2	—	12.7	43.4	—	—	33.2	42.9	39.7	42.7	49.1	2.0
イスラエル	0.2	—	4.9	0.5	—	—	—	3.2	0.3	3.0	2.3	24.5
イスラエル	0.7	—	—	0.4	—	—	—	0.7	0.3	0.7	0.8	44.7
イスラエル	16.6	—	102.5	1.3	—	—	5.2	18.9	2.7	17.6	18.7	18.2

ルバノ	0.3	0.7	0.0	—	0.1	0.2	0.1	0.2	0.2	—
ンア	0.4	2.7	0.0	—	0.4	0.3	0.2	0.3	0.3	—
スル	0.2	0.1	—	—	0.1	0.0	0.1	0.1	0.1	—
シヤ	0.0	0.9	0.2	98.4	0.4	1.0	0.3	1.0	1.1	—
コダ	—	0.0	—	3.4	0.1	0.2	0.0	0.2	0.2	14.7
ラ	5.2	12.2	16.4	291.8	7.3	6.9	13.1	7.4	8.7	7.8
ニ	0.9	3.3	0.1	—	—	5.7	0.0	5.2	5.3	64.3
オ	0.2	0.9	12.5	—	—	2.2	8.1	2.7	3.2	136.9
ニ	0.9	0.7	0.2	—	0.4	1.1	0.1	1.0	0.8	16.7
ノ	1.2	0.7	22.6	78.2	—	1.0	0.1	1.6	13.6	16.7
キ	6.5	6.3	—	9.6	9.6	0.3	17.9	0.3	0.3	4.4
タ	0.1	2.8	—	6.1	0.1	0.3	0.8	0.5	0.6	11.4
ラ	0.1	1.8	0.3	89.5	1.7	0.5	3.1	1.8	2.1	12.9
グ	0.7	0.4	4.7	85.2	0.2	1.6	0.8	3.4	4.0	—
ワ	0.8	4.9	1.4	9.5	7.1	3.4	3.5	15.2	12.3	3.9
ビ	5.6	4.1	1.1	—	4.3	16.3	2.2	15.2	12.3	10.2
ント	4.2	13.1	0.3	—	—	2.0	0.2	1.9	2.2	8.1
カ	3.0	10.2	1.2	—	—	5.9	1.5	5.6	5.8	4.3
フ	1.3	10.6	4.7	—	2.7	4.5	4.0	4.4	4.8	15.9
マ	0.3	—	5.0	—	—	1.8	3.2	1.3	2.3	—
イ	1.2	3.6	0.0	—	0.2	0.1	0.1	0.0	1.4	25.3
タ	0.3	0.1	—	—	—	1.4	0.0	0.0	0.0	—
ス	0.0	0.5	—	—	—	0.0	—	0.3	2.7	—
ス	1.0	2.5	0.0	—	—	3.6	0.0	3.3	1.0	33.1
エ	1.0	1.9	4.2	—	0.6	0.7	2.9	0.9	8.2	9.0
リ	3.9	28.0	8.4	23.8	11.1	7.7	9.4	7.8	1.7	4.6
ル	0.4	—	1.7	27.4	0.5	1.5	1.3	1.4	1.7	—
ン	1.8	3.7	13.0	—	—	3.6	8.3	4.0	4.7	5.8
コ	10.9	5.4	2.5	56.8	—	13.3	1.6	12.4	12.7	61.9
ダ	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
ハ	0.5	1.5	3.2	—	0.9	1.3	2.1	1.4	1.6	—
メ	1.0	6.4	0.4	127.6	—	1.4	0.6	1.3	1.6	11.4
ク	2.0	12.4	1.2	23.7	2.5	5.3	1.7	5.0	4.9	5.6

産 物 構 成 比

食糧需給の国際比較

三三

卵	牛 乳	油 脂	果 物	せ ん い	嗜好飲料	た ば こ	総 計
1.0	19.3	0.4	—	4.6	—	—	100.0
1.6	9.1	2.4	8.1	4.5	—	1.2	100.0
2.0	16.4	0.3	4.1	14.8	0.1	0.4	100.0
3.2	24.7	0.6	9.2	0.0	—	0.1	100.0
6.1	27.9	2.2	2.0	0.5	0.1	0.2	100.0
1.2	4.7	0.6	0.5	—	1.3	0.7	100.0
1.7	5.8	1.3	8.6	5.4	16.3	2.4	100.0
3.9	19.5	1.3	1.3	0.1	0.4	2.8	100.0
0.8	1.2	12.2	—	7.9	31.4	0.6	100.0
3.5	13.5	1.3	3.3	2.6	—	1.5	100.0
1.2	0.1	1.5	5.8	0.8	2.3	2.5	100.0
1.4	10.3	0.9	2.4	2.7	18.9	2.1	100.0
3.7	8.3	3.6	18.0	2.6	0.1	1.2	100.0
3.6	24.3	2.9	0.4	0.2	4.6	—	100.0
3.6	9.0	1.0	—	—	40.4	0.9	100.0
3.3	26.9	0.8	1.4	0.0	—	—	100.0
1.2	6.0	0.3	37.7	0.5	10.2	0.2	100.0
3.6	10.1	2.0	—	16.9	29.8	0.6	100.0
3.6	51.4	1.3	0.6	0.0	—	—	100.0
2.8	23.4	1.1	13.4	0.2	0.0	0.5	100.0
3.1	3.1	0.8	11.4	0.0	0.3	0.2	100.0
3.1	10.5	6.8	16.0	0.6	—	8.9	100.0
1.1	2.9	0.5	3.7	5.6	19.3	0.7	100.0
2.6	6.8	0.7	43.7	1.1	9.5	2.8	100.0
4.1	14.0	3.0	9.1	0.9	—	1.6	100.0
2.2	17.7	2.6	0.7	8.5	1.3	1.4	100.0
1.2	13.9	1.4	—	4.2	—	3.5	100.0
0.3	11.5	3.4	1.0	5.1	0.4	2.2	100.0
2.0	21.7	0.3	0.2	0.8	—	—	100.0
13.3	12.6	4.1	25.8	3.0	—	0.9	100.0
2.9	13.5	3.6	20.4	0.4	—	0.8	100.0
2.1	5.8	6.1	12.1	1.0	—	1.5	100.0
1.5	5.8	6.2	37.5	0.7	—	4.7	100.0
1.6	10.0	8.0	4.9	—	—	2.8	100.0
1.9	0.7	0.2	3.3	1.0	8.6	1.2	100.0
0.9	3.1	—	0.3	—	1.8	1.8	100.0
3.4	14.2	2.7	5.8	11.1	3.3	2.8	100.0
8.6	31.6	0.6	2.2	0.1	—	—	100.0
1.9	4.5	1.3	1.2	23.2	—	0.4	100.0
4.1	38.2	4.4	2.5	1.0	—	—	100.0
0.4	23.0	2.2	1.9	9.8	0.6	2.4	100.0
2.6	4.4	1.9	35.3	—	2.9	1.1	100.0
0.3	6.4	1.1	13.0	3.5	1.1	9.8	100.0
0.7	5.6	1.5	0.8	13.3	4.3	0.3	100.0
4.2	0.1	0.9	5.1	2.0	2.1	5.9	100.0
2.9	19.7	1.4	0.9	0.4	0.1	0.8	100.0
2.1	5.5	8.5	24.4	0.9	—	—	100.0
2.7	12.5	2.0	6.4	1.1	—	1.1	100.0
1.9	14.0	1.1	8.4	5.3	—	1.7	100.0
1.9	15.0	2.4	—	13.1	—	—	100.0
2.8	17.5	0.8	9.7	0.8	—	0.5	100.0
2.9	5.1	2.0	9.1	—	—	—	100.0
3.7	42.7	1.2	2.7	0.1	—	—	100.0
1.3	8.6	4.5	8.0	24.6	—	2.1	100.0
1.1	12.6	1.9	12.6	5.4	0.3	4.0	100.0
0.5	4.0	1.0	—	5.8	16.2	1.0	100.0
1.1	6.7	1.7	3.3	16.4	—	—	100.0
8.4	6.2	3.4	1.5	1.0	—	0.4	100.0
4.9	13.3	3.8	3.5	5.0	0.1	2.8	100.0
1.8	13.0	1.4	3.7	11.8	—	—	100.0
1.5	3.4	2.9	16.7	1.4	8.0	2.0	100.0
1.9	11.1	1.5	8.6	1.2	0.4	1.4	100.0

付表 2 農 業 生

	穀 類	半 穀	砂 糖	豆 類	野 菜	肉 類
アフガニスタン	40.7	0.0	0.3	1.4	9.6	22.7
アルゼンチン	18.9	2.0	2.1	0.3	2.8	47.0
オーストラリア	16.8	0.6	5.4	0.1	2.3	36.6
オーストリヤ	10.9	12.1	2.9	0.2	5.0	31.0
オーストラリア	7.7	6.0	3.9	0.6	7.4	35.3
パキスタン	16.1	17.0	5.6	6.6	11.6	34.1
ブラジル	16.7	9.5	5.9	5.1	1.0	20.5
ブータン	33.0	2.0	3.0	0.2	4.2	28.7
カサハル	12.4	1.7	0.0	22.6	6.9	2.4
カンボジア	19.1	5.4	1.4	3.3	14.5	30.6
タイ	23.4	13.3	12.2	6.3	11.2	19.5
インドネシア	8.7	5.8	16.4	2.5	1.5	26.2
ジャバ	15.5	5.8	2.2	7.7	17.6	13.5
ジャバ	24.0	2.4	0.5	10.2	4.2	22.7
ジャバ	6.7	0.7	7.5	6.5	1.4	22.4
ジャバ	13.2	3.6	1.7	0.5	2.3	46.3
ジャバ	7.5	5.2	4.3	7.1	5.5	14.4
ジャバ	12.4	0.2	3.9	4.7	2.1	13.6
ジャバ	13.7	7.8	1.1	0.2	1.2	19.1
ジャバ	13.6	5.8	0.1	0.7	9.5	28.9
ジャバ	9.8	12.2	2.8	0.0	3.5	31.5
ジャバ	15.5	1.8	0.4	3.3	15.1	12.6
ジャバ	11.0	0.4	33.2	2.5	7.5	11.6
ジャバ	13.3	1.3	2.0	4.6	0.9	10.9
ジャバ	7.3	7.1	4.2	1.4	13.0	34.2
ジャバ	31.7	0.4	2.4	3.6	2.4	25.2
ジャバ	31.3	0.1	0.1	1.9	15.5	26.9
ジャバ	41.0	1.2	7.6	23.1	1.0	2.1
ジャバ	5.7	6.8	1.5	0.1	26.0	34.8
ジャバ	1.5	1.8	1.6	1.0	12.6	21.8
ジャバ	12.8	2.1	1.8	12.0	14.9	14.7
ジャバ	11.0	0.7	—	5.6	50.4	3.7
ジャバ	5.6	1.8	0.8	2.2	27.5	5.6
ジャバ	14.1	1.3	—	15.3	17.8	24.2
ジャバ	38.1	9.6	5.6	4.4	5.1	20.1
ジャバ	—	0.3	85.8	0.4	3.8	1.7
ジャバ	17.5	0.8	7.1	6.3	3.6	21.4
ジャバ	4.9	9.3	3.8	1.1	9.0	28.8
ジャバ	2.0	0.8	1.7	0.2	2.1	60.5
ジャバ	5.7	11.4	0.1	—	4.1	28.5
ジャバ	39.9	0.4	4.3	5.5	4.5	5.3
ジャバ	13.1	2.5	4.5	7.0	1.7	23.8
ジャバ	5.3	20.8	3.5	2.8	1.6	30.8
ジャバ	10.8	10.1	14.5	3.2	14.7	20.1
ジャバ	32.9	3.8	3.7	7.1	7.7	24.7
ジャバ	13.6	26.6	5.7	0.7	6.1	21.2
ジャバ	14.4	5.3	2.9	3.9	16.3	15.9
ジャバ	28.2	5.1	4.1	4.4	7.7	24.8
ジャバ	19.2	0.8	7.1	2.8	4.4	33.2
ジャバ	12.8	1.2	0.1	18.6	5.7	29.1
ジャバ	7.0	9.5	0.9	0.3	6.1	44.9
ジャバ	51.6	1.3	9.4	10.3	1.7	6.5
ジャバ	14.1	4.8	2.7	0.4	2.1	25.6
ジャバ	19.1	0.4	0.9	9.3	6.7	14.6
ジャバ	28.9	1.8	3.0	4.1	15.1	9.2
ジャバ	7.9	31.3	2.3	12.5	3.1	14.5
ジャバ	27.0	1.2	7.9	3.8	19.3	11.6
ジャバ	10.7	5.8	3.5	0.6	6.7	34.1
ジャバ	24.1	1.3	1.4	0.8	4.6	34.3
ジャバ	7.5	1.0	0.9	2.0	2.4	54.5
ジャバ	12.9	5.5	6.6	8.9	2.6	27.6
ジャバ	31.0	5.7	1.6	2.7	6.9	25.9

食糧需給の国際比較

糧 消 費 額 指 数

(アメリカ=100)

食糧需給の国際比較

三四

肉 類	卵	牛 乳	畜 産 計	油 脂	食用農産 物消費計	魚	総 計
12.3	3.9	35.3	16.3	4.0	25.0	—	24.9
106.9	30.6	51.9	88.4	92.0	96.2	140.0	96.4
116.1	61.6	131.9	114.4	27.5	109.1	307.1	110.2
65.7	60.8	101.6	72.7	69.6	90.7	175.3	91.2
62.8	70.0	110.2	73.3	110.1	83.5	394.1	85.3
20.1	5.3	12.1	17.1	23.3	27.9	16.5	27.8
30.6	19.3	24.5	28.3	33.4	53.2	129.4	53.7
80.4	81.7	127.0	90.2	65.6	97.4	276.5	98.4
2.3	6.0	7.3	3.7	20.5	25.8	502.3	28.5
33.5	21.7	41.8	34.1	37.6	48.3	398.8	50.3
17.9	8.3	1.8	13.7	28.9	35.5	823.5	39.9
35.0	12.8	54.4	37.0	92.9	44.3	117.6	44.7
19.2	37.7	33.0	23.8	104.2	56.6	840.0	61.1
14.7	15.4	49.4	22.0	29.2	28.0	16.5	27.9
23.2	34.3	77.3	35.5	36.9	39.4	163.5	40.1
72.4	56.5	117.2	80.2	63.8	94.2	570.1	96.8
21.0	11.5	30.0	22.0	16.5	52.5	321.2	54.0
14.0	25.1	78.1	28.4	31.8	33.5	225.9	34.6
37.7	41.2	202.8	72.3	20.2	73.7	489.4	76.1
77.0	58.6	110.0	82.2	89.2	114.1	444.7	115.9
65.4	67.2	112.0	75.2	90.4	94.6	304.7	95.7
26.3	34.9	47.9	31.6	197.9	65.1	565.9	67.9
13.3	10.3	15.2	13.4	14.8	43.5	17.6	43.3
11.1	22.2	22.8	14.6	11.1	35.6	54.1	35.7
53.1	45.6	51.1	52.0	93.4	72.5	50.6	72.4
15.7	9.1	21.1	16.2	27.8	25.3	47.1	25.5
18.1	5.6	32.7	20.0	18.8	32.8	50.6	32.9
1.0	1.2	19.4	4.9	26.8	20.5	70.6	20.8
65.4	83.7	178.5	90.6	30.6	106.8	237.6	107.5
37.9	103.7	23.5	41.0	86.6	58.0	424.7	60.1
31.7	48.3	25.2	31.9	163.3	74.5	327.1	75.9
4.0	9.4	64.4	17.0	90.1	43.3	43.5	43.3
15.7	14.0	24.7	17.4	91.5	52.1	121.2	52.4
9.5	4.8	18.4	10.9	68.5	24.9	80.0	25.2
16.3	11.6	3.9	13.3	5.4	34.5	238.8	35.6
5.7	9.3	27.6	10.6	73.4	30.6	328.2	32.3
22.2	27.2	49.1	64.1	54.8	40.5	155.3	41.2
49.0	63.1	115.0	46.1	72.9	73.6	484.7	75.9
117.8	84.6	164.8	124.5	20.2	115.8	275.3	116.7
42.0	45.3	126.4	59.9	110.4	73.4	1,750.6	82.9
3.3	1.9	49.0	12.7	26.6	27.5	100.0	27.9
32.4	24.0	28.4	30.8	38.6	59.7	650.6	63.0
44.1	2.9	27.6	36.8	25.9	60.5	17.6	60.2
18.3	4.5	15.5	16.5	37.2	34.8	482.4	37.3
15.8	18.0	2.0	13.1	9.9	29.4	668.2	33.0
50.0	40.1	97.1	58.9	48.0	78.8	308.2	80.1
19.7	18.5	20.3	19.7	138.6	55.7	142.2	63.4
38.0	28.8	59.8	41.7	45.6	60.8	110.6	61.1
50.4	17.4	36.0	44.4	19.3	51.7	407.1	53.7
21.8	10.3	46.9	25.9	30.8	31.7	43.5	31.8
63.6	51.3	131.8	76.6	81.9	95.5	232.9	96.3
7.0	14.4	22.2	10.8	52.0	28.9	627.1	32.3
55.3	61.2	160.5	77.7	60.9	85.8	894.1	90.4
13.1	7.8	23.2	14.7	69.2	32.3	0.5	32.1
13.6	10.0	38.3	18.4	39.1	54.7	181.2	55.4
15.8	3.8	0.7	11.5	12.9	34.1	285.9	35.4
9.4	5.9	18.2	10.9	31.3	32.5	249.4	33.7
62.8	75.3	128.4	77.6	69.2	86.5	810.6	90.6
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
125.7	38.1	99.4	112.1	72.0	108.0	98.8	108.0
26.3	16.9	34.5	27.1	52.5	46.0	858.8	50.6
30.0	16.2	48.6	32.6	48.9	53.7	37.6	53.7

付表 3 1 人 当 り 食

食糧需給の国際比較

	穀 物	芋 類	砂 糖	豆 類	野 菜	果 物
アフガニスタン	228.8	0.5	7.6	5.6	31.5	—
アルゼンチン	142.1	182.1	84.5	23.7	64.2	226.0
オーストラリア	122.4	95.0	127.1	57.3	82.2	105.5
オーストリア	146.4	269.2	92.1	74.6	94.1	275.2
ベネズエラ	127.8	277.6	77.8	62.5	104.4	111.6
ボツワナ	131.0	257.7	6.7	64.2	54.8	2.9
ブラジル	228.0	464.2	95.7	218.5	12.7	137.6
カナダ	114.5	200.0	113.4	64.7	114.9	155.1
チェコスロバキア	255.0	73.1	44.5	276.7	60.6	—
中国	170.0	157.7	74.2	62.9	101.5	32.7
台湾	251.5	155.7	22.3	137.9	81.0	56.6
インド	100.6	226.4	127.5	65.9	15.9	25.9
インドネシア	166.2	258.2	46.0	171.6	176.0	186.3
イタリヤ	156.7	56.7	4.6	77.6	21.9	2.6
エクアドル	131.9	27.4	89.3	77.2	15.0	—
エリトリア	174.2	302.0	124.2	98.3	97.3	163.2
エチオピア	112.2	223.9	69.4	119.8	58.1	393.3
フィリピン	142.1	5.5	39.2	79.7	29.9	5.3
フランス	130.7	218.4	95.2	17.7	20.0	106.8
ドイツ	140.4	249.8	75.8	78.9	213.4	462.0
ギリシャ	108.5	342.8	80.1	71.1	69.3	362.5
インドネシア	216.0	89.6	36.9	169.8	181.2	185.9
ジャバ	153.7	13.9	460.0	63.4	72.3	47.5
ジャマカ	137.8	55.7	36.3	79.7	8.4	291.9
ホンジュラス	146.7	247.3	66.5	82.3	142.2	164.7
ハイチ	205.6	8.0	45.5	29.7	9.9	4.9
インドネシア	180.6	8.5	70.3	31.0	90.6	—
インドネシア	228.9	21.4	24.8	218.1	3.5	5.1
イスラエル	188.0	576.6	115.3	46.1	195.5	87.6
イスラエル	159.2	78.1	78.7	70.3	144.6	65.8
イタリア	194.1	105.0	56.4	415.5	182.8	315.0
イヨルバ	187.1	23.9	55.2	99.6	180.4	78.2
レバノン	194.1	35.3	54.5	84.9	150.6	286.3
マリ	157.7	20.9	42.3	142.2	32.5	29.5
マダガスカル	348.2	253.7	18.4	50.9	35.4	30.6
モロッコ	263.4	27.4	91.8	118.1	43.3	3.8
メキシコ	156.5	31.3	79.0	172.8	22.4	66.1
モザンビーク	114.2	216.4	109.1	81.0	81.0	101.8
ニジェール	119.7	140.3	115.6	68.5	96.8	70.0
ノルウェー	105.0	262.2	98.3	59.1	54.6	186.0
パキスタン	286.9	9.5	34.0	48.7	22.5	12.9
パナマ	197.9	111.4	70.8	242.7	19.8	356.9
パラグアイ	113.1	882.6	66.3	117.7	18.9	198.1
ペルー	141.7	296.5	62.5	94.0	105.1	7.8
ポランド	236.1	75.6	30.6	148.7	38.8	34.1
ポルトガル	221.7	812.4	70.3	15.5	128.6	26.4
ブルガリア	165.4	204.0	46.6	77.2	142.9	298.5
ブルキナファソ	271.1	173.1	30.2	78.0	96.2	107.4
南アフリカ	188.1	30.3	97.4	32.8	49.1	35.8
スウェーデン	113.2	36.3	24.2	171.1	36.1	—
スウェーデン	134.1	168.7	106.4	175.4	99.9	294.5
スウェーデン	233.2	47.8	66.0	103.4	13.8	64.6
スウェーデン	100.7	215.9	99.7	64.2	45.6	223.1
スイス	194.4	19.9	39.7	85.8	53.2	80.4
シエラレオネ	293.0	88.1	43.3	170.3	177.0	196.7
ウズベキスタン	67.2	1,061.7	23.7	330.2	26.7	0.5
アラブ首長国連合	266.8	24.9	32.8	77.2	112.4	27.4
アイルランド	118.8	210.9	137.6	54.7	71.1	158.0
アイスランド	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
ウクライナ	165.4	143.3	94.5	35.8	53.0	110.4
ベネズエラ	103.9	192.5	81.1	209.9	19.3	190.7
ユーゴスラビア	267.8	180.6	38.8	106.9	67.2	123.7

食糧構成比

食糧需給の国際比較

肉類	卵	牛乳	畜産物計	油脂	計	魚	総計
25.7	1.1	21.8	48.6	0.5	100.0	—	100.0
57.4	2.2	8.3	67.9	2.7	99.2	0.8	100.0
54.6	3.8	18.4	76.8	0.6	98.4	1.6	100.0
37.3	4.6	17.2	59.1	2.1	98.9	1.1	100.0
38.2	5.6	19.9	63.7	3.7	97.4	2.6	100.0
37.5	1.3	6.7	45.5	2.4	99.7	0.3	100.0
29.5	2.5	7.1	39.1	1.6	98.6	1.4	100.0
42.3	5.7	19.9	67.9	1.8	98.4	1.6	100.0
4.2	1.4	4.0	9.6	1.9	90.0	10.0	100.0
34.5	2.9	12.8	50.2	2.1	95.5	4.5	100.0
23.2	1.4	0.7	25.3	2.1	88.3	11.7	100.0
40.5	2.0	18.8	61.3	1.8	98.5	1.5	100.0
16.3	4.2	8.3	28.8	4.8	92.2	7.8	100.0
27.3	3.8	27.3	58.4	2.9	99.7	0.4	100.0
29.9	5.9	29.6	65.4	2.7	97.7	2.3	100.0
38.7	4.0	18.6	61.3	1.8	96.7	3.3	100.0
20.2	1.5	8.5	30.2	0.8	96.6	3.4	100.0
20.9	5.0	34.8	60.7	2.6	96.3	3.7	100.0
25.6	3.7	41.1	70.3	0.9	96.4	3.6	100.0
34.4	3.5	14.6	52.5	2.2	97.8	2.2	100.0
35.3	4.8	18.0	58.1	2.8	98.2	1.8	100.0
20.1	3.5	10.9	34.5	8.1	95.3	4.7	100.0
15.9	1.6	5.4	22.9	1.1	99.8	0.2	100.0
16.1	4.3	9.8	30.2	0.9	99.1	0.9	100.0
37.9	4.3	10.9	53.1	3.6	99.6	0.4	100.0
31.8	2.5	12.8	47.1	3.2	99.0	1.0	100.0
28.5	1.2	15.3	45.0	1.6	99.1	0.9	100.0
2.5	0.4	14.4	17.2	3.7	98.1	1.9	100.0
31.5	5.3	25.6	62.4	0.7	98.7	1.3	100.0
32.7	11.8	6.0	50.5	4.1	96.0	4.0	100.0
21.6	4.4	5.1	31.1	6.1	97.6	2.4	100.0
4.7	1.5	23.0	29.2	5.8	99.4	0.6	100.0
15.5	1.8	7.3	24.6	4.9	98.7	1.3	100.0
19.6	1.3	11.2	32.1	7.7	98.2	1.8	100.0
23.7	2.2	1.7	27.6	0.5	96.2	3.8	100.0
9.1	2.0	13.2	24.3	6.4	94.3	5.7	100.0
27.9	4.5	18.4	50.8	3.9	97.9	2.1	100.0
33.4	5.7	23.4	62.5	2.8	96.4	3.6	100.0
52.2	5.0	21.7	78.9	0.6	98.7	1.3	100.0
26.2	3.7	23.6	53.5	3.8	88.1	11.9	100.0
6.2	0.5	27.0	33.7	2.8	98.0	2.0	100.0
26.6	2.6	6.9	36.1	1.9	94.2	5.8	100.0
37.9	0.3	7.1	45.3	1.2	99.8	0.2	100.0
25.4	0.8	6.4	32.6	2.9	92.7	7.3	100.0
24.8	3.7	1.0	29.5	0.7	88.6	11.4	100.0
32.3	3.4	18.8	54.5	1.6	97.8	2.2	100.0
16.1	2.0	4.9	23.0	6.1	87.3	12.7	100.0
32.2	3.2	15.1	50.5	2.3	99.0	1.0	100.0
48.6	2.2	10.3	61.1	1.1	95.7	4.3	100.0
35.4	2.2	22.8	60.4	2.7	99.2	0.8	100.0
34.2	3.6	21.1	58.9	2.5	98.6	1.4	100.0
11.2	3.0	10.6	24.8	4.5	89.0	11.0	100.0
31.7	4.6	27.4	63.7	1.8	94.3	5.6	100.0
21.2	1.7	11.1	34.0	6.2	100.0	0.0	100.0
12.7	1.2	10.7	24.6	2.0	98.1	1.9	100.0
23.1	0.7	0.3	24.1	1.0	95.7	4.3	100.0
14.4	1.2	8.3	23.9	2.6	95.8	4.2	100.0
35.6	5.7	22.1	63.4	2.1	94.9	5.1	100.0
51.8	6.9	15.3	74.0	2.8	99.4	0.6	100.0
60.3	2.4	14.2	76.9	1.8	99.5	0.5	100.0
26.9	2.4	10.5	39.8	2.9	90.4	9.6	100.0
28.9	2.1	13.1	44.9	2.6	99.6	0.4	100.0

付表 4 1 人 当 り

	麦・米類	芋 類	砂 糖	豆 類	野 菜	果 物
、ア	41.2	0.0	1.2	0.3	8.2	—
フル	6.6	2.5	3.4	0.4	4.3	11.4
ア	5.0	1.2	4.5	0.8	4.8	4.7
オ	7.2	3.9	3.9	1.3	6.7	14.7
オ	6.7	4.4	3.5	1.1	7.9	6.4
ベ	21.1	12.9	0.9	3.6	12.8	0.5
ボ	19.1	11.6	6.9	6.3	1.5	12.5
ブ	5.2	2.7	4.5	1.0	7.6	7.7
カ	40.2	3.4	6.1	15.0	13.8	—
セ	15.1	4.2	5.7	1.9	13.1	3.2
チ	28.2	5.2	2.2	5.3	13.1	6.9
台	10.1	6.8	11.1	2.3	2.3	2.8
コ	12.2	5.8	2.9	4.3	18.6	14.8
イ	25.2	2.7	0.6	4.3	5.1	0.5
エ	14.7	0.9	8.6	3.0	2.4	—
コ	8.1	4.2	5.0	1.6	6.5	8.2
デ	9.3	5.5	5.0	3.4	7.0	35.4
エ	18.4	0.2	4.4	3.6	5.6	0.8
フ	7.7	3.8	4.8	0.4	1.7	6.8
フ	5.4	2.8	2.5	1.1	11.9	19.4
西	5.1	4.8	3.2	1.1	4.7	18.4
ギ	14.3	1.8	2.1	3.9	17.3	13.3
グ	15.9	0.4	41.1	2.3	10.8	5.3
ハ	17.3	2.1	3.9	3.4	1.5	39.8
ホ	9.1	4.6	3.6	1.8	12.7	11.1
ハ	36.2	0.4	6.9	1.8	2.5	0.9
イ	24.6	0.3	8.3	1.5	17.8	—
イ	49.3	1.4	8.0	16.2	1.1	1.2
アイ	7.8	7.2	4.2	0.7	11.8	4.0
イ	11.9	1.7	5.1	1.8	15.6	5.3
イ	11.5	1.8	2.9	8.4	15.6	20.2
イ	19.4	0.7	4.9	3.6	27.0	8.8
ヨ	16.6	0.9	4.0	2.5	18.6	26.6
レ	28.1	1.1	6.5	8.7	8.3	5.7
リ	43.8	9.5	2.0	2.2	6.4	4.2
ダ	36.6	1.1	11.0	5.6	8.7	0.6
モ	17.0	1.0	7.4	6.5	3.5	7.8
メ	6.7	3.8	5.6	1.6	6.9	6.5
オ	4.6	1.6	3.8	0.9	5.4	2.9
ニ	5.7	4.2	4.6	1.1	4.3	10.9
パ	46.2	0.5	4.7	2.7	5.2	2.2
パ	14.1	2.4	4.3	5.9	2.0	27.5
バ	8.4	19.6	4.3	3.0	2.0	16.0
バ	17.0	10.6	6.5	3.9	18.2	1.0
パ	32.1	3.1	3.6	7.0	7.6	5.0
ポ	12.4	13.6	3.4	0.3	10.4	1.9
ポ	11.7	4.3	2.8	1.9	14.6	22.9
ル	19.9	3.8	1.9	1.8	10.2	8.6
南	15.7	0.8	7.0	0.9	5.9	3.2
ス	16.0	1.5	3.0	8.3	7.3	—
ス	6.2	2.3	4.3	2.8	6.7	14.9
ス	32.4	2.0	7.9	4.9	2.8	9.7
ス	5.0	3.2	4.3	1.1	3.3	12.0
シ	27.2	0.8	4.8	4.1	10.7	12.2
ト	23.7	2.1	3.0	4.7	20.7	17.3
ウ	8.5	40.1	2.6	14.4	4.9	0.1
ア	35.5	1.0	3.8	3.5	21.6	3.9
イ	5.9	3.1	5.9	0.9	5.1	8.5
ア	4.5	1.3	3.9	1.5	6.5	4.9
ウ	6.9	1.8	3.4	0.5	3.2	65.0
ベ	9.2	5.1	6.2	6.4	2.5	18.3
エ	22.4	4.5	2.6	3.1	8.1	11.2

付表 5 日本の食用農産物生産額

	付表 5 日本の食用農産物生産額									
	構 成 比 (%)					アメリカを100とした場合の指数				
	昭和9 ～13年	26年	30年	35年	40年	昭和9 ～13年	26年	30年	35年	40年
穀類	44.0	38.9	40.1	33.6	24.8	11.4	11.4	14.8	15.3	14.0
芋類	6.7	10.2	10.0	8.1	6.2	31.5	54.2	67.1	66.6	63.9
砂糖	0.3	0.2	0.3	0.5	0.7	1.2	1.3	2.1	4.4	6.8
豆類	2.9	2.7	2.8	2.2	1.2	22.8	24.4	31.6	30.5	20.2
野菜	27.5	31.2	23.8	25.8	26.8	37.3	48.0	46.5	61.8	79.8
果物	7.0	5.7	6.3	9.2	9.4	12.5	11.4	16.1	28.9	36.4
肉類	5.0	4.2	6.3	6.8	12.1	0.9	0.9	1.6	2.2	4.8
卵	4.0	4.0	5.2	6.5	5.8	5.0	5.7	9.4	14.3	26.9
牛乳	1.1	1.6	2.7	4.1	5.7	0.5	0.8	1.8	3.4	5.9
畜産物	10.1	9.8	14.2	17.4	27.6	1.2	1.3	2.4	3.6	7.2
脂	1.5	1.3	2.5	3.2	3.3	2.5	2.4	5.7	8.9	12.1
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	6.8	7.6	9.7	11.9	14.8

付表 6 日本の1人当り食糧消費額

	付表 6 日本の1人当り食糧消費額									
	構 成 比 (%)					アメリカを100とした場合の指数				
	昭和9 ～13年	26年	30年	35年	40年	昭和9 ～13年	26年	30年	35年	40年
穀類	39.6	33.7	30.9	26.8	21.9	266.6	223.7	244.5	247.2	246.7
芋類	3.9	5.4	6.1	4.4	3.4	87.6	120.9	161.2	136.8	127.9
砂糖	4.1	1.9	3.0	3.1	3.2	31.6	17.6	27.0	32.8	40.7
豆類	2.3	1.4	2.0	1.9	1.5	45.3	27.2	45.7	49.1	48.7
野菜	22.1	23.5	18.2	19.8	19.9	102.9	108.4	99.7	126.6	155.8
果物	5.9	4.3	4.8	7.1	7.5	36.5	26.1	34.9	60.5	78.2
肉類	4.4	3.1	4.8	5.7	10.0	2.6	1.8	3.3	4.6	9.8
卵	3.1	3.0	3.9	4.8	7.1	13.6	12.9	20.0	28.7	52.1
牛乳	0.8	1.3	2.3	4.1	4.8	1.5	2.5	5.2	11.1	15.8
畜産物	8.3	7.4	11.0	14.6	21.9	3.4	3.0	5.3	8.1	15.0
脂	0.5	0.9	1.3	1.8	2.3	5.6	9.4	16.5	26.6	41.4
食用農産物	13.3	78.5	77.3	79.5	81.6	26.3	23.5	27.5	33.1	41.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	710.6	1,135.3	1,421.2	1,520.4	1,638.8